

授業改善シンポジウムに参加して

国語教育・東賢司

1. シンポジウム概要と感想

平成 28 年 10 月 27 日（木）午後 2 時半～4 時までの間、教務委員会 F D W G と教育コーディネーターが主催する F D シンポジウムが開催された。司会進行は教務委員会 F D W G リーダーの杉田先生が担当した。

今回のシンポジウムのテーマは「地域を核として教育と研究をつなぐ」である。数年来の F D シンポジウムとはテーマが大きく異なっており、参加人数の少なさが心配されたが、当日の参加者は例年より多い程であり、関心の高さに驚きを感じた。

司会の杉田先生の挨拶と会の趣旨説明に続き、学部長の佐野先生が挨拶された。いつもは義務的に参加している人もいるかもしれないが、NHK のドラマ「夏目漱石の妻」を例に挙げられ、発表者の題目をみるととてもおもしろそうなものが並んでおり楽しみにしているという話があった。

続いて、統括教育コーディネーターの鴛原先生がテーマ設定の趣旨について説明された。教育に関わる者はたくさんいるが、大学の教員だけは自分の研究を教育に生かすことができる、これを有効に生かしたいとの考えが示された。また、愛媛大学が採択された C O C + のテーマ「地（知）の拠点大学による地域創生推進事業」が採択されているが、教育学部は全学に貢献しているが全学的な認知は乏しく、研究がどのようにすれば教育に結びつけることができるのかを互いに認識し、地域作りの基礎となる人材を育成していることを感じたいという発言もあった。

(1) 佐藤栄作先生「『坊っちゃんのことなんて、何も知らなかった』」について

非常に興味深いタイトルであり、参加者の興味を引いた。自分が愛媛大学に赴任したことはそもそも愛媛の方言やアクセントの研究をすることになったが、それが徐々に別の問題に取り組むことになり、『坊っちゃん』の手書き文書や研究会に参加することになり次第

に方向が変わったことが紹介された。ただ、自分の研究が地域の人との繋がりに生かされ、ひいては教育にも反映されるようになったことを披露された。また、自分の仕事を研究しながら、地域との繋がりに結びつけていることはとても重要な事であると感じた。

(2) 中野広輔先生、榎木暢子先生「標準的な教育制度ではドロップアウトする危険性が高い児童生徒に対する学習支援の拠点形成プロジェクト」について

中野先生の最初は「コーヒーの飲み方」の話から始まった。先生の人となりを知らない私には非常に印象に残った。続いてタイトルの解説があったが「広い意味での特別支援の対象になる人々」が幅広く存在することを意識させられた。

また、特別支援の先生方が病院等に関わるようになったのは特別支援の学生が病院などで支援をしたいという希望から始まった活動であるとお聞きし、その支援の体制やきっかけに関心をもって拝見した。榎木先生からは子どもへの病院の支援では、「話をきいてほしい、遊んでほしい」ということがきっかけになっており、これは、愛媛大学が行っている地域連携実習でも子ども達は大学生に遊んでほしいという理由から参加していると聞いたことを思い出した。やりたいことができないという要望をどのようにチームで解決するか、またやりたいことがやれるようになることが大切との指摘に胸を打たれた。

(3) 福井一真先生「『つくりたいものをつくり隊』キックオフ・プロジェクトの取組から」

個人的には最も印象に残る話でした。最初に話をしたのが「肥後守」。そして取り出したのが、刀の数々。刃が長いもの短いものがあり、銃刀法を出しながら話始めたことは強く印象に残った。

また、現場の先生方に道具の有無を確認したところ、同じ学校でも同一の回答がないと

いうことも驚いた。日頃アンケートばかり行っている教員にとっては、アンケート以前にその回答者の理解そのものに問題が内在していることを意識しておく必要があることがわかった。

また、アンケートには「学びたくても学べない」という声が多かったということには驚いた。学生さんに置き換えると、自分が経験したことの無い内容を体験してみることは長く教師を続けていく上ではとても重要ではないか、また、即効性のある現在の教育内容だけでは問題があるのではないかと感じた。

今年の3年生の授業で、鉛筆を自分で削っていた学生を見た。おそらく福井先生の授業に感化されて自分で削ったのだろうと思うが、そのときは何も知らず「鉛筆をしっかり削るように」と言ってしまった。種々反省することが多い。

(4) 全体討論

近年のFDシンポでは珍しく、自由討論の時間をしっかりと確保できた。駕原先生からは、「何かを入れると何かを削らないといけないと思うがどうか」という質問があった。一見答えにくい質問であるが、時間が限られている授業時間であれこれいれようとする、何かを押し出されることになることは理解できた。

また、深田先生からはオープンキャンパスなどへの活用について、露口先生からは履修証明プログラムに応用することの提案があった。教育学部では地域への貢献についての新たな取組が喫緊の課題であるが、これらに可能性の光を当てる指摘であったと思う。

最後に司会の杉田先生から、外在的なものが内在的になってきた、外のニーズを形にするきっかけになればありがたいという挨拶があり終了した。

2. 自らの授業改善の方策、計画

書道関係者と議論をするなかで、近年、学生の授業に対する取組の質について問題に思っていることがある。「学生が勉強しない」、「伝えた内容について、理解をしている・理解をしていない」という以前に、基礎となる事項が共有出来ていないのではないかという不安である。これはそれほど難しいものでは

なく、指導要領に記載する内容程度のものである。基礎部分が異なってくると学習の方向性が誤まったり、意味がなくなることになりかねない。例えば、我々は、文字を書くのに鉛筆・ペンを使用すると思っているが、受講生にとっては、むしろ文字を書くということよりも、指でスマホに文字を打ち込むということが主体になっている。文字を書くことよりも文字を打つことが時間的にも凌駕していることは承知しているが、更にはこのことだけではない。

別の例を挙げると、例えば、教科書を執筆している大学の教員は、自分の学習の過去を振り返ると、毛筆を時間をかけて学習し、毛筆が硬筆の字体や字形を構成する基礎と確信している（無意識に脳や体にしみこんでいる）。しかしながら、スマホで文字を打ち込むことが主体となっている受講生の多くは、当然のことながら毛筆で文字を書くという経験が少なく、線の一画一画の基準的な書き方が理解出来ない。ましてや複数の点画が組み合わせられた一つの文字では、形に対する理解がまるで違っているということがしばしば起こっている。日本人に対する国語教育と外国人に対する日本語教育は素材は同じであっても教育の方法は違うと考えていたが、両者が限りなく近づいているという印象を持っている。今迄に「文字の丸字化」や「文字の正方形化」が問題視されたことはあったが、それらを遙かに大きく飛び越えて文字を書くこと自体が人間の行為として不要になっている。日常的に文字を書くことが「不易」だと思っている者にとっては、徐々に変化の速度を速めている「流行」に変わっていることを驚きおののいている状況である。毛筆学習も硬筆学習も意味をなさないという時代の到来がやってきていることを自覚したい。

今回のFDシンポで学んだことと絡めると、どの授業でもシラバスをしっかりと立てているので、新しい内容を加えることは難しいと思われる。ましてや書写のような思考の根本が崩れかかっている教科では、根本的に内容の入れ替えが必要になるであろうと予測している。